

●国旗のマナー

元山口大学経済学部教授 古賀武陽

国旗に向かって起立し国家を斉唱するということは国民として当たり前のこととと思っていましたが、どうもこの頃では違うらしい。昔、祝祭日は「旗日」といって、各戸の門前には日の丸が翻(ひるがえ)っていたものだが、最近は正月でさえ日の丸を揚げない。自宅に日の丸があるかと学生に質問したところいつもゼロ回答だ。当然のなりゆきとして、彼らが所帯を持って日の丸を揚げないだろう。こうして、この国から国旗を掲揚するという習慣が消えて行くのだろうか。この国の機関はもちろんのこと、地方の公的機関、議場、学校、外国人客の多いホテル、交通機関、神社仏閣などでは「旗日」だけでなく常時国旗を掲揚し、国旗の下で国民としての絆を確かめたいと思う。ニュースでもよく見るように、アメリカの街には、いつもどこかに星条旗が翻っている。「アメリカはいつもどこかで戦争しているからな」と言う人がいるが、日本もまたいつも災害と闘い、多くの人命を失っていることを思えば、この日の丸の下で結束して行くことが如何に大事かがわかる。

いうまでもなく国旗はその国のシンボルであり、自国旗に対してはもちろんのこと、他の国旗に対しても十分に敬意を持って取り扱いたい。日の丸(正しくは日章旗)を軽視する人が星条旗(アメリカの国旗)に敬意を表すのは容易ではあるまい。ある時、私はアメリカの州知事を案内してある自動車部品メーカーの本社を訪れたことがある。本社ビルの門前には、国旗掲揚のポールに日章旗を中心に星条旗とそのメーカーの社旗が掲揚されていた。ところが星条旗は、上下逆様。50個の星が並んでいる左上の青い部分は「CANTONカントン」といい、常に左上になければならないのに、この会社では何を勘違いしたのか上下逆になっていた。しかも、社旗は国旗ではなく「団体旗」にあたるから、国旗と同じに扱えない。私はすぐ応接に出た担当者に星条旗の位置を正して頂いたが、実に冷や汗ものだった。

この様に、国旗の掲揚には国際的に承認された一定の原則や慣行があり、時には外交上の問題に発展することもある。日章旗が左右、裏表が同じである為、外国旗に対してもつい安易に対応してしまうので、国旗掲揚の基本原則をよく弁えておかねばならない。

みなさん、国旗を揚げよう!



兵庫県議会議員

北野実 後援会

〒670-0836

姫路市神屋町3丁目37-4

TEL 079-288-8182

FAX 079-288-9175

E-mail minoru@kitano-minoru.com

ホームページ www.kitano-minoru.com